

学術集会長挨拶

東京女子医科大学看護学部・大学院看護学研究科

長江 弘子

このたび、日本エンドオブライフケア学会第2回学術集会を2018年9月15日（土）・16日（日）の両日、一橋大学一橋講堂（神保町）で開催させていただくことになりました。

本学術集会のメインテーマは「エンドオブライフにむけてすべての人の意思表明を支えあうケア」としました。エンドオブライフケアとはすべての人々が一人の人間として「いのちをどう支えるのか」あるいは「自分らしく（その人らしく）生きるとは何か」、本当の「豊かさ」は何か、人間本来の存在の意味を問い誰にでも訪れる「いのちの終わり」にどう向き合うかを問うことです。その意味で、エンドオブライフケアは医療の中だけではなく、国民一人一人がそれぞれの立場で身近な人の生と死にかかわり「生老病死」に向き合うこと支え、支えられる社会の中にこそ必要なケアの心であると考えます。

老いや病いを抱えながら地域社会で生活し続ける人々の暮らしのあり様、家族との関係性や生や死に関する価値観、社会規範や文化との関連した、来る長寿社会における新たな生き方の探求の在り方として、エンドオブライフケアの重要性が高まっています。エンドオブライフケアの実現には、その人がどう生きたいかを知ることから始まり、「どう生きたいか」について語る事が大切です。ですが「どう生きたいか」を語ることは簡単なことではなく非日常的な何かきっかけがないと意識しないことかもしれません。だからこそ、「いつかは来る死」について考え、語り合うことをとおして「どう生きたいか」を意識化し理解しあう「意思表明のプロセス」が重要なのだと考えています。

そこで本学術集会のプログラムは、教育講演やシンポジウム、一般口演、示説のほか、参加者同士が語り合う場として交流集会、カフェ、リレー講演とラウンドテーブルディスカッションを企画しました。参加者が一堂に会し時間と場を共にし、参加者一人一人が自分のエンドオブライフについて考え、さらには大切な人のエンドオブライフを支えることについて語り合うことをとおして「生きるを考える」機会になればと願っております。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。